

3.11 からの出発——東京子ども図書館の災害復興への取り組みについて

本岡 享子

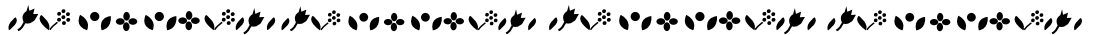
あの日からすでに1カ月がすぎました。みなさまは、今日までの日々をどのようにお過ごしだったでしょうか。直接被害に遭われた方々はいうまでもなく、だれもが自分たちの存在の根っこを大きく揺さぶられ、すぐにはことばにならない思いを味わっていると思います。3月11日の直後から、東京子ども図書館としては何をなさいますか、ぜひ何かしてください、東京子ども図書館が何かなさるなら、協力したいと思います、という声が、あちこちから寄せられました。だれしも抱く思いは同じ。あの惨状を知るにつけ、何かしなければ、じっとしてはいられない、という気持ちにみんなが駆り立てられていることがよくわかりました。

もちろん、わたしたちも何かしたい。でも、やみくもに動き出すことがよいとは思えない。時間をかけて、わたしたちにできることは何か、それをするためにはどんな仕組みや人、そして、どれだけのお金が必要か、そのお金をどうやって工面するかを、考えたいと思いました。まだ、具体的な計画が立っているわけではありませんが、とりあえず今考えているところを、以下にお伝えしたいと思います。

事業の計画を立てるにあたって、わたしたちは、つぎの四つのことを考え方の基本におきました。第一は長い期間にわたって行うこと（10年をめどに、さしあたって3年から5年にわたる計画を立てたい）、第二は、東京子ども図書館がこれまでにしてきたこと、蓄えてきた経験を生かせる活動をしたいということ（お話の講習会の修了生によるお話訪問など）、第三は、すべての活動を人と人を結ぶ形で行いたいということ（顔の見える関係を軸に動くことを鉄則にする）、第四は、臨時の特別の事業でなくふだんしていることをふだんどおりにやること（いずれすべての活動が通常業務に織り込まれていくように）です。以上のような基本的考えかたのうえにたつて、さしあたっては、わたしたちのもっている人的ネットワークを通じて、また実際に現地を訪ねて、どんな活動がのぞまれているか、どんな活動が可能かをさぐることからはじめたいと思っています。

比較的すぐにでもはじめられるのは、子どもたちに本を贈る運動をしている諸団体に、本選定の相談に応じること、あるいは本のリストを提供することです。また、近刊の『ブラジルのむかしばなし』を被災したブラジル人の子どもたちに贈ることです。

少し準備を整えてから進めたいのは、要請のあるところにボランティアを送って、子どもたちにお話やわらべうたを届けてもらう事業です。訪問は原則としてボランティアとして行っていただきますが、必要な方には、また、くり返し訪問する際には、交通費だけは助成したいと思います。これは、「おばあさんのいす」事業の延長、あるいは発展した活動とも位置づけています。また、訪問に合わせて、お話やわらべうたといっしょに本を届けることもしたいと思います。これは、一冊がひとりとひとりをつなぐ形で本を届けることを原則にしたいと思って



います。これには、日本国際児童図書評議会などとも協力したいと思います。

さらに、半年先、一年先、あるいはもっと先になるかもしれませんが、大きな被害を受けた、文庫、学校図書館、公立図書館の児童室などに、とくに蔵書再建の面で手助けをすることを考えています。この活動については、児童図書館研究会、日本図書館協会等、関連の諸団体との連携をとりながら進められたらいいと思っています。

さらに、**長期的に考えているもうひとつのことは、これらの活動の記録をしっかりとること**です。そして、その都度、ニュースレターの形で、あるいはホームページで、ご報告申し上げ、なおかつ、最終的には、本にまとめたいと思っています。子どもと本との出会いが生む力を伝える記録は、わたしたちの仕事への意欲をかきたて、励ましてくれるはずです。

以上のような活動を行うには、**資金が必要です**。東京子ども図書館の経常の予算には、上記のような活動をするための余裕がまったくありません。3年から5年の活動に、概算で、少なくとも1000万円必要だと見ていますが、とりあえず活動をスタートさせるためだけでも、印刷費、通信費、交通費、その他に100万円ほどの基金が必要です。自分でも何かしたい、また、どういう使われ方をするのかを見届けられない寄付をするよりは、自分の関心のある子どもの本の領域で行われる活動を支援したいと思っています。いろいろな方々、どうぞご支援ください。また、ほかではできないような活動をご提案ください。みなさまからの、ご意見や、ご要望をとりいれて、実効のあがる、また関わる者にとって、よりやりがいのあるたのしい事業を展開したいと思います。

まだこのプロジェクトに名前もついていません。理事長の松岡と理事の小関が中心になってこの事業を進めることになっています。上記の事業のほかに館でも常時さまざまな催しを計画しています。詳細についてはホームページ、また機関誌の発行に合わせて、ニュースレターの形でお知らせいたします。

最後に、もうひとつお願いがあります。今回の災害では、被災地の子どもだけでなく、どの子ども、被害を受けているのではないのでしょうか。テレビで見た津波のおそろしさ、刻々と伝えられる原発の危険、くり返される大きな余震、停電や、大人たちの様子、まわりで見聞きするこれらのことで、不安を抱かない子どもはいないと思います。被災地に出かけなくても、今いる場所で、まわり子どもたちに、ふだんより細かい心遣いをしてくださること、少しでも不安をとりのぞくことができるようなことばをかけてくださること、それが、だれにでも、今すぐにでもできる「復興活動」だと思います。ひとりでも多くの子どもたちが、健康で、安定した心をもって育つことが、国を建て直す力になると思いますから。

(2011年4月16日記)

- ・現時点での計画について、もう少し詳しく書いたものがあります。ご希望の方はご連絡ください。今後、活動の詳細はホームページにてご報告していく予定です。